

D・H・ロレンス原作『ポール・モレル』(二)

D・H・ロレンス 著
山田晶子 訳

ポールは父親がヒューズを作っているのを眺めることが好きだった。そのときには、ランプがマントルピースの上に置かれ、弾薬の粉が白いテーブルの真ん中に置かれていた。ウォルター・モレルは、長いしつかりとした麦わらを持ってきて、漆が塗られた金色のチューブのように見えるまで両手で磨いた。その間、ポールはその甘い香りを嗅いでいた。わらを六インチの長さに切ってから、モレルは危険な折りたたみナイフをしまつて、わらでできたチューブのうち、切れ込みがあるものには、それをふさぐために両端は開いたままにしておいて、石鹼を詰めた。ポールはすでに石鹼が詰められたわらをつかみ、小さな手のひらいっぱい分の弾薬粉を取つて、六インチの長さの金色のわらがいっぱいになるまで、詰めた。次に皿に入れてある濡れた石鹼の塊を親指の爪ですくつて、ヒューズに蓋をした。そして鉄製の弾薬缶の中にほおり込んだが、父親はこの缶

を朝になると炭鉱まで持つていくはずであった。ポールは、黒い弾薬粉がわらの中を滑つていくのを見ることが、粉の幾分か洗つて白くなつたテーブルに斑点を付けながら軽やかに逃げていくのを見ることが、とても面白くて楽しんだ。そして最後に粉が一粒も逃げないように、ヒューズの口を塗りつけるのをものすごく楽しんだ。

この間に、四歳かそこらのアーサーは、父親の肘先に立っていた。二人はいつも話を楽しんだ。

「お父ちゃん、炭鉱の中にいるお馬について話してよ。」

「いいとも。タファイという名前の馬つこがいるんだ。タファイはやんちゃだが手ごわいやつなんだ。まあ、小さくてやんちゃでいたずらつ子だと言つていいな。」

と、モレルは話し続けた。彼はおかしさと興奮をいっぱい引き出すような声で話した。子供たちは、その声音が突然低く

なったり速くなったりするのを聞いてぞくぞくした。

「どんな毛色の馬なの？」

ポールは忙しくてじつと黙って聞いていたが、質問をしたものだった。

「茶色さ。栗色と同じ茶色だよ、お前。」

モレルは、口調を変えて一層熱心に、しかしかしこまって答えたものだ。それから、アーサーに向かって、以前の誇張した声音でまた話を続けた。

「そして奴はガタガタ音を立てながら馬小屋へやってくるんだ。しかし、ちよつとよそ見をすると、奴はにじり寄ってきて、ジャケットのポケットに鼻面を突っ込んで、フンフン言うんだ。」

ここで、モレルはアーサーの顔に鼻を近づけてフンフン言っていたために、アーサーが笑い声を上げざざめいたので、母親までが微笑んだのであった。

「そして奴はポケットの中に少しのタバコを見つけると、それをかんで顔を上げ、またかんで顔を上げるのだよ。もしタバコが紙にくるまれているままだと、破くんのだ。」

モレルはその動作を真似してみせた。アーサーはまたもやキヤッキヤツと笑い声を上げた。彼は美しい目をしていて、ポールは彼を抱き上げて思った。

「だけどタバコって体にいいの？ どんな味がするの？」

「苦いさ——ぜんぜんおいしくないさ。」

父親は声の調子を微妙に変化させながら答えた。彼はポールに対してはより丁寧で上等の英語を使った。

「それじゃなぜ馬はそれを食べるの？」

「そうだな、分からんよ、お前。多分奴はそれが好きなんだ。」

ポールはその夜寝る前に、父親のポーチからタバコを少し取ってかじってみた。そして、子馬がこんなものを食べたとき、どんな気持ちになったのだろうかといぶかしんだ。

「だけでもシファイがポケットの中にタバコを見つけれなかつたときには、首に温かい息を吹きかけるんだ。そして鼻を顔に押し付けてきてたくさんしゃべるんだ。だけど奴は俺をときどき飛び上がらせるんだ。だから俺は『出て行け！』と怒鳴ってやるのさ。すると奴は狂人のように頭を振り上げて、突然歯をかむんだ。ホントウニ、困ったやつだよ。」

モレルの奥さんは、耳を傾けながら喜んでいた。このようなときには彼女は夫が非常に好きであった——ポールもこのようにときには父親が好きだった。アニーは「永遠に」と言っているほど人形と遊び続けていた。ウイリアムは、荒つぽくて元氣いっぱいの子供だったので、いつも外に出かけていた。母親はいつも忙しかった。

「もつと他にも話をしてよ、お父ちゃん。もつと話して。」

と、アーサーは叫び、興奮して踊りまわった。

「うん、奴は後ろへ回って頭でそつと突くんのだ。突くんのだよ。だから『タファイ、何がほしいんだ』と訊くと奴はまたもや頭を

乗せるんだ。すこしタバコをもらうと、膝まで頭を下げてかむんだ。そして鼻が石炭に触れそうになるくらいまで下げてかむんだ——楽しんでるのさ。」

子供たちは父親が話してくれたこれらの物語をいつまでも覚えていた。だけでも、母親が話してくれたアンデルセンの物語は忘れてしまったのだった。ポールはこのような夕方には非常に幸せな気持ちになった。幾分かほっとした気持ちから味わう幸福感であった。

土曜日から月曜日の晩には、しばしば彼は階下の激しい喧嘩の音で目を覚ましたものだ。父親の声は重々しい響きからむつむつとした声になり、突然、ほとんど叫び声に変わった。テーブルをバンツと、突然げんこでたたいた。母親の声は憤怒に満ちていたが哀れっぽくて、激しく苦しんでいることが感じられたので、ポールはその声を聞くと心が傷つけられるように思った。時折物がぶつかると大きな恐ろしい音が聞こえ、ときどき突然深刻な沈黙が襲ったが、それは血が流れたためだと彼には分かっていた。ポールが耳をそばだてながら、まっすぐに緊張して横たわりながら、しょつちゅうではないがときどきに生じるこれらすべてを聞いたとき、彼の魂の内部に地獄が生まれていたのだった。テーブルを叩くげんこは、まさに彼の上に打ち下ろされたものであったのだ。

ひどい状態になった夜はそのようなものであった。そして父親が外出していたとき、子供たちは重い心のまま寝るために階

段を上がついていった。何か母親に降りかからなければいいが、と心配しながらいやいや床に就いた。母親は階下で酔っ払って帰ってくる夫を待っていたのであった。

「神様、どうかお父さんがお酒を飲むのを止めますように。」
ポールは二十年間、毎晩、祈ったのであった。時には「さもなければ炭鉱で事故に遭って死にますように。」

彼は、もし父親が炭鉱事故で死ねば、災害給付金がもらえるだろうということを知っていた。

ともあれ、もう一度幸せな夕方のことを述べてみよう。七時半には子供たちは床に就いた。アーサーは叫んだ。

「ぼく、お父ちゃんと寝てもいい？」

モレルの奥さんは、お父ちゃんはそんなに早く寝たくないのだよ、と答えたのだが、モレルが言った。

「いいさ、一緒に寝るよ、可愛い奴！」

彼は、子供が自分を求めていることが嬉しかった。

「でもぐっすり眠っているときにベッドを移されたら、風邪を引くんじゃないかしら。」

と、母親が答えた。

「いや——奴は風邪など引かないさ——そうだな、お前。」

「うん、引かないよ。」

それでモレルは子供と一緒にベッドまでぶらぶらと行った。

ポールはウィリアムと一緒に屋根裏部屋で寝たのだが、兄は遅くまで起きていても怒られなかった。それでポールは軒の小

鳥が立てる音を聞きながら、家の最上階で一人ぼつちで横たわっていたが、ランプを揺らしながら夜勤で出かけていく鉱夫たちの影が、天井に広がって映るのを眺めていた。ポールは暗闇をときどき非常に怖がったが、ときどきはぜんぜん怖くなかった。彼は怖いということで母親に面倒をかけなかった。屋根が傾いているところで黒い影が揺れまわって生きていると確信したとき、彼は断固として目を閉じて思った。「可愛い小さな少女よ——」を暗唱しよう。心臓を早鐘のように打たせ、げんこを固く握り締め、彼は断固として詩を繰り返した。

「きれいな小さな少女が木の下に座っていた

目が開いている限り刺繍をしながら——」

お気に入りのこの詩を暗唱し終えると、今度は賛美歌を歌った。このようにして、彼は六歳で恐怖に打ち勝ち、眠りに落ちた。小さかったけれど、彼は誰の邪魔もしたくなかったし、また出しゃばって出て行きたくなかった。

ウィリアム・モレルはポールの相手になるには年が離れすぎている。長男は、背が高く体格が良く、荒削りの顔立ちでそばかすがあり、赤毛であった。彼は元気で活発で、大体いつも上機嫌であった。母親が大好きだったけれども、しばしば向こう見ずなために、また無慮だったので、彼女を大いに傷つけた。彼女が心底悲しんでいたときには、彼は打ちひしがれて、大きな体をしていたので洗い場に逃げ込んで、後ろにあるローラータオルに顔を押し付けて泣いた。他のときには年上の少年

たちと一緒になっていて、六、七歳年下のポールのことはほとんど気にならなかった。このようなときには、ポールはアニーの世話を受けることになった。彼女はもじやもじやした黒髪をしていて、お転婆になつていた。ウィリアムと同様に、彼女も年上の仲間を好んだ。ウィリアムとは違って、彼女はいつもポールと一緒にいることが好きであった。彼を自分のそばから離さなかった。それで彼は新しい世界を知った。

モレルの奥さんは、自分にまつわりついている階級に誇りが感じられなかった。彼女は、自分の精神と他の奥さんたちの精神の食い違いのせいで、ブリーチの女性たちとは親しく交わらなかった。しかしながら、彼女たちのほとんどと表面上は友好的に暮らしていた。そして彼女たちから尊敬されていた。彼女は生まれと育ちが他の女たちよりもずっと洗練されていて優れていたが、本質的には自分も彼女たちもまったく同じであると認識していたためであった。だから、モレルの奥さんは、誰に対しても決して保護者的にはならず、慈悲深くはならなかった。そしてモレル家の子供たちは、どんな子供たちとも好きなだけ交わり、夜でも休日でも、好きな場所で通りを走った。ポールが六歳で、アニーが九歳のとき、後者はブリーチのお転婆な少女たちとグループを作っていた。ポールだけがこのグループに参加することを許されていた。若い少女たちの年齢は九歳から十三歳にまでわたり、少年たちに対しては敵対心を持っていて排他的であった。この若いアマゾンたちは彼女たちの兄弟と

同じくらい荒っぽくて無鉄砲であった。だが彼女たちは独自の関心ごとを持っていて、それを若い少年たちには秘密にしていた。ポールは、母親が「メンフクロウのアニー」と呼んでいた姉に使い回された。彼は身軽で素早く、静かで、融通が利いたので、姉と同じくらい速く走ることができたし、彼女の試合に自分が主催しているかのごとく参加することができた。そこで彼は彼女の身代わりになってプレーした。冬の夕方には、彼女たちはかくれんぼのゲームに夢中になったし、『リンカンシャーからやってきた三人の男たち』に合わせて前後に踊ったし、本物の野蛮人たちのごとく、ブリーチの暗い荒地を疾走した。そしてどこにいても、激情的なアニーと一緒に、ポールは逃げ、興奮し、若い心臓が脈打った。ときどきは、これらの若いバッカスの巫女たちは神秘的な雰囲気に含まれて、物語を語る夕べを持つとしたものだった。そのときにはできるだけ大勢がろうそくを一本、またはそのかけらを持つてきた。その当時は、鉱夫たちは採掘場で、まとめ買いをしたエメラルドブルーのろうそくを使っていた。これらのろうそくを三、四本盗んだ少女がいたし、また裕福な子はワックスのろうそくを調達したと思われる。他の少女たちは、獣脂でできた不ぞろいの長さのろうそくをくすねた。これらのろうそくが十分あったので、またマッチは年上の大胆な少女たちが持つていたので、モレル家の子供たちは家から決して何も盗まなかったと言つてよい。グループはたまたま空いていた豚舎か道具小屋か石炭小屋

に隠れた。手に入った一本か二本のろうそくの周りに集まつて、彼女たちは物語を語り始めた。誰もが一つは話さなければならなかった。しかしポールは数に入っていなかった。少女たちは、威勢の良いゲームにおいては彼がいることを寛大にもとがめなかったが、このお話サークルでは彼にいてほしくなかった。しかしながら、アニー・モレルは彼をしつかりと自分のそばに置いておき、もし彼を入れないなら自分も来ないと宣言したので、彼はこのような秘密会議のただ一人の男性参加者であることを許可されたのだ。アニー・モレルは、『醜いアヒルの子』、『小人たち』の物語など貴重な話をたくさん知つていて、口達者であつたので、おしゃべりが他の人間ならば口やかましいという欠点になりがちな場合にも、彼女にはそれが美点になつた。だから彼女を除外することはできなかったのだ。

少女たちが語つた話は、たいていが一般的に良く知られたものばかりであつたが、不気味で忌まわしく「邪悪な」いくつかの話は子供っぽい想像力から生まれたに違いなかつた。残忍で醜い物語が少しばかり貯えられていて、語り継がれてきた。大人たちは一度も聞いたことがない話だつたが、それは大人の耳には聞くに堪えないものだつたからである。子供たちさえも、ある年齢に達するとこれらの話を忘れてしまった。というのもこれらは誇張されすぎており歪みすぎていたからであつた。だがおそらく幼年の者たちの間ではこれらの話は存続していたと思われる。これらの話を聞いた時、ポールは大きなショックを

受けた。というのも少年たちの物語、つまり男の子の秘密の話は、女の子たちの話とものすごく違っていたからであった。ろうそくの明かりのふちにじつとたたずみ自分の存在を忘れさせるようにしながら、彼は、大きな残忍な少女がその話を繰り返すのを聞いていた。一方で他の少女たちはこそこそとつつ、怖がりながらも楽しんで耳を傾けていたので、彼にはこの少女が怪物ではないのかと思われるほどであったし、どの少女も心の深遠には隠れた恐ろしい怪物を内包しているのだらうと、彼は確信を持つほどであった。

ポールの母親が、彼が秘密の物語会に参加して少女たちが語ることを聴いていることを知った時、彼は自分に取っては恥ずべきであるこれらの物語について何も言わなかったけれども、モレルの奥さんは彼をこのような物語会から徐々に引き離し始めた。彼はとても静かで遠慮がちで自信がなかったために少年たちとは首尾よく交わることができなかった。彼は幼いアーサーと一緒にいることが多かったが、活発で気難しい弟にとつては面白い存在であった。そこでポールは大抵は一人で遊んだものだ。お気に入りの遊びは、スレート版に想像上の場面を描くことであった。

まったく小さかったときに、夏になると機関車道、つまりモーヴェン炭鉱の近くの鉄道交差点までの半マイルほどをぶらぶらと歩いていくことが好きであった。平らな交差点には、八本か九本の炭鉱鉄道のレールが広く広がっていた。そこではト

ラックはいつも整列して並んでいた。ここでは小さな炭鉱の機関車が、いつもハイパークやワトノールにある炭鉱から、ブリズリーかまたはグレート・ノーザン・レイルウェイまで、無蓋貨車を引つ張りながら通過していった。ほら、機関車が往復している。ほら、うづくまつたちつぽけな信号小屋のかたわらの高い鉄製の足場から、象の鼻のように垂れ下がった皮のパイプを使って、水が供給されている。ポールは、あえいでいる止まった機関車の腹の中に水がゴウゴウと流れていく音を聞くのが大好きで喜びに震えた。ほら、巨大な馬たちが往復のために使われている。葦毛の馬のネロが三台か四台のからの無蓋貨車につながれて、枕木に足を合わせて自分を動かないようにして胸帯に全重力を預け、鎖が切れんばかりに引つ張り、ついにシャントアの金切り音に合わせて貨車が動くまで、ポールは拳を握りしめていた。一方でネロは喘ぎながらも堂々として大まかに歩いた。交差点の向こうには、炭坑の材木置き場があり、材木や丸太が積み重ねられていた。農業用の馬や探鉱で働かせる馬のうまやもあつた。不揃いの線路の向こうでは、いつも干し草を高く積み上げた大荷車が会社の見事な馬に引かれて揺れながら進んでいった。また飼料のビートや穀物の麻袋を積んだ荷車も見えた。また、荷車は貨車から降ろした石炭を積んでいて、エンジンレインでそれらをごろごろと降ろした。

ポールは、汚く埃っぽいハコベが生えている土手に腰を下ろして、何時間もこの産業の野外劇を眺めていることが大好きで

あつた。たつた五歳だつた時、家から走り出てここに座り眺めていたものだったが、まもなく荷車の御者が彼を見つけ、モレルの奥さんに「おかみさん、モーヴェン交差点のすぐ上の所にあんたんとこの子供がいるよ。すぐに事故が起きて死んじまうよ。」と知らせた。モレルの奥さんは心配したが忙しかつたので、その男にポールを家へ帰らせてくれないかと懇願した。荷車引きがポールに帰るようにと論じた時、彼は青ざめて縮み上がったが、決して返事をしなかつた。彼は決して石炭を積んだ荷車に乗ろうとはせず、素速く家へ走つた。基本的に彼は夢見がちにぶらぶらするか、軽く素速く走るかのどちらかであつた。それは彼の目的が何であるかで決まつた。

ポールが六歳になつた時の冬は非常に厳寒であつた。ブリーチの通路は二ヶ月間固く凍つていた。その時すでに十三歳になつていたウイリアムは背が高い骨張つた少年になつていて、寛大で衝動的でせっかちで、かつ非常に活動的であつた。金髪の子供は彼一人だけであつた。ポールの髪は暖かな栗色に変わり、とてもふさふさとしていて、一方彼の目は明るい忘れな草の青色であつた。

彼はかなり愛らしい少年になりつつあつた。だが彼のふつくらとした唇は、あたかもすでに悲しみのために氣力を失つてしまつたかのようにかすかに開かれており、目は深く窪んでいて重い頑固な表情をしていて、ときには心配そうであり、ときには苦しんでいて、ときには嘆願しているようであつたが、常に

頑固な表情をしていた。

ウイリアムは、ポールをネザーミア湖へ連れて行つてやると約束をしていた。その湖は幅が半マイルで長さはその倍あつて、ブリーチから一マイル離れている美しい谷間にあつた。ウイリアムはスケートをしたかつたし、ポールは氷の上で滑り、また氷を眺めたかつた。ポールは物事を眺めるのが好きであつたが、行動することは氣乗りしなかつた。スケーターたちがさつそうと自分を追い越して滑つてゆくのを見た時、ポールは彼らが羨ましかつたが、彼らと交ろうとはしなかつたし、自分が上手にできないことは決して公衆の前でしようとはしなかつた。ぎこちなく馬鹿だと思われるよりは、受動的でいて、無知だと思われている方がよかつた。少年たちは茶色の砂糖がまぶされたバター付きパンのサンドイッチを持つていた。ポールはかなり健康状態がもろかつたので、注意深く着込み、厳かにウイリアムの監督下に置かれていた。

美しい朝だつた。太陽が霧氷をきらきら輝かせていた。二人の少年たちはたえず寄り道をした。最初は古い羊橋に立ち寄つた。そこでポールは、水中で自分の青いポットが凍っているのを発見したがそれに手が届かなかつた時、不思議な喜びを感じた。次に立ち寄つたのは、ダムであつたが、水が道路際まで溢れて広がつていた。ウイリアムはひと滑りした。ポールは驚異と喜びでいっぱいになつてダムの門のところまでぶらぶらと歩いて行つた。門は下がつており、落下する水が凍つていた。少

年は大蛇のように上へ下へと這っている氷のロープを見た。事実は荒れ狂う大滝であるものの、水際に立つことは彼には畏怖すべきことのように思われた。彼は足を踏み鳴らした。氷が破裂して二十フィート下の牧場へ突進することを考えると！彼はもう一度足を踏みしめて震えた。それから彼は、霜枯れした広大な沖積した牧場を見やったが、そこでは寒さで赤らんだビロードのような毛の馬たちが物寂し気にあちらこちらへと動いていた。彼は、厳しい冬にがっしりと捕まれて大地が寂しそうで無感覚になつている様子を見ることが好きだった。自惚れ屋の大地が目に見えないものによつて、このように無力にも囚われてしまうことが彼を喜ばせた。灌木の茂みの中封印されて、草が動けないように固定されてしまつていた。ポールは父親がまだ子供であつた時、拾い集めた落穂を持ち込んだ円錐台形の粉引き小屋の塔が、氷の横に暗く立つていた。ポールは父親の子供時代がどんなにか楽しいものであつたに違いないと思つた。

兄弟二人は踏み切り交差点まで進んでいった。エンジンに給水するためのタンクの下では、巨大な炎がむき出しで燃えていた。少年たちはそこで体を暖めた。ポールは炎がタンクのとつぺんまで揺らめき昇るのを眺めた。彼は、それが鉄の基部をくすぐり、こすることを、中に入っている水が温かくなつたために不安定になつて動くことを想像した。この間、ウィリアムは火に燃料を与えようとして石炭の小塊や木の切れ端を探してい

た。信号小屋の男が——ポイントは線路のそばでレバーから引つ張られていた——少年たちを見ようと出てきた。

「行こう。」

と、ポールが言つた。

彼は誰かから言葉を掛けられることを極端に恐れていた。その男に怒鳴られるよりも、むしろ火の喜びを全部捨て去つてしまいたいと思つた。

とかくするうち、ウィリアムは貨車の車輪のアクセルの上で油箱を広げていた。

「これは貨車のバターなんだ。腹が減つたら人間でもこれを食べることが出来る。」

と、彼は言つた。

ポールは、自分がバーム油でできた汚い悪臭のするバターをパンの上に塗つて、食べている姿を想像した。

「乾いたパンでも食べられる。」

と、彼は答えたが、ウィリアムが不愉快な考えを押し付けられることを喜ぶだろうか、と訝しんでいた。その瞬間、小屋から出てきた男が二人に怒鳴つた。ポールはショックを受けて隠れたいと思ひ、縮こまつた。そして、ただ二人を追い払いたために荒つぽく叫んだその男を激しく憎んだ。どう猛な気持ちで彼を憎悪した。殺せたら殺したものを。そしてまた、少年時代が終わるまで彼を決して許さなかつた。その瞬間、彼はまた、兄に対してもうつくつした嫌悪感を抱いた。というのも兄はお

せつかい感からどかし気に干渉をして、番人のいじめに對して自分たち二人を屈させたからである。ウィリアムは弟の氣持ちを全然察することなく、ただ番人を嘲つた。

丘の頂上から兄弟は炭鋳を見た。それは立坑が二つある大きなものであつた。黒い土手を作つており、金色を放つ冬のもやの中でバランスの取れたシルエットを作つていた。主軸台の上に棟飾りを付けて、綱を運ぶ四つの車輪が速く回転し、暗きらめき、一瞬止まりまた反対方向へときらめいた。回つていくエンジンは、大きくて壮麗な蒸氣の柱を上方へと吹き上げ、その蒸氣は、立坑の上に高く舞い上がる羽毛のように白く揺らいだ。炭鋳は黒い活動をしながらちらちら光り、うつろな音を響かせ、その周りの全てのものは高くそびえ、氷のような蒸氣の柱を徐々に広がらせ、金色っぽいもやの上で青い色に変え、大地と天の間の存在物を、あたかも生きているかのように揺らしていった。巨大な炭鋳の丘は、高い天までその切り立った端を突出し、はるか下方のふもとには池があつたのだが、山のようにもやの上に浮かび上がった。そしてポールは、ちつぽけな姿、人影、人間、馬と荷車が、坂道を骨折つて登つていくのを、切り立つた崖の頂上に小さく留まるのを眺めていた。神の目に映ればまことに細かく小さな存在である我々人間の労働劇を眺めていた。その時少年たちは小石がガラガラと下方へ落ちていくかすかな音を聞いた。巨大な丘が燃えている所に上がる煙の影を見た。小さな影のような人間と馬が戻つてくるのを見た。彼

らは天から坂を這い下つて来る時、そんなにもちつぽけに見えるのだから、はるか遠くに存在する神々によつて、そのような穀粒のような命がいかにして重視されようか？ しかしながら、もし炭鋳の丘の上で、その穀粒一つが小石の重荷を背負つたまま倒れるなんてことが生じたならば、取り返しがつかない悲劇となるのであつた。炭鋳は音楽のようなリズムを帯びて喘ぎ、唸り、震えた。その黒い、組織的な動きのただなかで、大きな扇風機、危険な黒い物が、緩やかに回つていのが分かつた。地面の上方に突然椅子が置かれ、上手の地面の方へ小さな男たちが去つていくのが分かつた。ポールは眺めることに夢中になつていた。彼は、同じ情景を眺めながら一時間立ち尽くすことができた。

しかしウィリアムのスケート靴がいらいらと音を立てた。間もなく少年たちはノッティンガムとアルフレトンの白いハイウエイの半ばまで来た。道は凍つた埃で重かつた。木々は両側に高く完全に沈黙して立つていた。

道の丸い頂上に立つて、トネリコの大枝が形作つている繊細な線模様の間から彼らは、低い牧場や森の間にある氷を見た。それはミヤガラスが点々と留まつているうつろな灰色の空のようであつた。ポールは興奮して胸が震えた。だがウィリアムは駆け出した。それは一マイル平方かそこらの見事ななめらかな氷であつた。右側には黒いもじゃもじゃした森があり、左側には高低のある牧場があり、遙か遠くには森の下にひとすくい

の黒く縁取られた高台があった。

「お前は。お前はその辺を見てくるといい、そして僕がスケートをやっている間、一滑りしておいで。僕がスケートをしているのを見ていてもいいさ。」

と、ウィリアムはスケートをしつかり履いてから弟に言った。ポールは兄がスケートをしているのを見ていると上達したことが分かったが、後者はとうとう、自分の被保護者が寂しそうにしている様子を見てかわいそうになり、弟のそばにやってきて言った。

「なぜ滑らないんだ。他のことをやっていいんだよ。」

ポールはおとなしく歩き去った。彼は、敢えて大きな氷の滑り台を滑ろうとはしなかった。彼は見知らぬ人間に声をかけた、かけられたりすることはなお一層怖がった。そこで兄の手が届かない所まで来ると、自分と同じ年の、針金のような頭をした腕白小僧が滑るのを眺めていた。

「さあ、見てろ。」

とその悪たれは叫んで、片足で滑り台をさっそうと片足で滑った。いたずら小僧の厚かましさを面白がって、年上の少年のうちには拍手喝さいをする者もいた。

「やれっ！ 赤毛！」

と、彼らは叫んだ。

七歳のその「赤毛」小僧は彼らと戦う構えをした。

「やってやるとも、ぐじゅぐじゅ鼻達。」

と、彼は言い返した。ポールは気持ちが活気づいた。年上の田舎者たちは吠えた。赤毛はもうひと手柄立てようとした。彼はしやがみこみ、腰を下ろし、膝を抱え込んで滑り降りながらくるくると回った。誰かが彼を一突きしたので、独楽のように回転した。だがたちまち彼はものともせず立ち直った。

「ホホー、下っ端者達！ 水はおめえ達の汚れた偏平足の下で曲がっているんじゃないか。」

と、彼は嘲笑った。

彼は、彼らの大きくて不格好な足を指差しながら、大きな笑い声を上げて叫んだ。そしてなおも笑いながら、その悪たれはもう一度滑り台の下へ降りたが、今回は水を割ってしまった。つまり滑った時に一方の足でもう一方の足を踏んでしまったのだ。だが彼はいい気になりすぎていた。そして転覆してしまっただ。大きく吠えた。

「腕が、腕が、腕が！！！」

地面に横たわりながら彼は空を蹴っていた。「腕が、腕が！」といつまでも叫びながら。彼は抱き起され、連れていかれたが、なおも叫んでいた。

「腕、腕——ああああ、腕が、腕が、腕が！」

ポール・モレルはこの出来事にものごく心が痛んでいたのだが、ロープで囲まれた場所近くまで来ていた。その水は魚が呼吸をするようにと、およそ十フィート平方ほど切り取られていたのだ。黒い水が再び氷の上に溢れていた。ブラックス

ワンが冷たい穴の縁に不幸せそうに座っていた。足が冷えるかのようにときどき惨めそうに向きを変えその鳥に、ポールは同情を覚えた。彼は氷が広く寂しげに広がっているのを遠くまで眺めやり、内心震えた。

間もなく婦人がスケートをしながらやってきて、ロープにかまった。

「ポール・モレル——人ぼっちでここで何をしているの？」

それはメイさんだった。間もなく十五歳の背が高い中学生の少女、ルーシー・ステインズが以前の家庭教師のそばにやってきた。彼女は青白い顔をしており髪が長かった。

「それじゃ休憩しているの？」

と、ステインズ嬢が訊いた。

「違うわ。これはポール・モレルよ。」——ルーシーは関心がなかった。

「胸が弱いんだからここには駄目よ。」

と、メイさんが続けて言った。

「まあ、ちよつと、あの哀れなブラックスワンを見て。可哀そうに。」

と、ルーシーが叫んだ。

「あなたがたのお父さんがいらつしやるわよ。」

と、メイさんが明言した。

背が高く、やせて、色が黒く、羊肉の塊のような頬髯を生やした男性が近づいてきた。彼は動滑車のある椅子式車を押して

いたが、それには六歳ぐらいの、血色がよく幸せそうな小さな女の子が乗っていた。彼女はいろいろな一つひとつの対象物に静かに目を動かした。ステインズ氏は上品な態度でゆつくりとスケートをした。彼の後ろから黒いヴェールを冠った婦人がやってきた。それはステインズ夫人で、そのか弱い体の動きはいつもおどおどしていた。

「これは全く感情の持ち方の勉強になる！」

と、ステインズ氏は車を止めるや否や、大声の、垢抜けした口調で言った。

彼はブラックスワンの方向へ、演説をするときのように手を伸ばした。

「ほらごらん、自分の領域から疎外された流れ者がいる。すべてのごとに無関心だ——」

ブラックスワンはいらだたしげに背後を振り向いた。

「さて、この子だが、迷った仔ヤギのように当惑している」

——彼は笑った——「私がスラングを使つたと思わないでくれ！」

——ヤギの仔のことを言っているんだから——」

「この子を知っているのですか？」

ステインズ夫人が低い、音楽的な声でさえぎった。彼女はメイさんの方を向いていた。

「ポール・モレルです——私がモレルの奥さんのことを話すのをお聞きになったことがありますね。」

と、家庭教師は答えた。

「この子は寒くて可哀そうだわ。」

と、ステインズ夫人は哀調に満ちた音楽的な口調で言った。

ポール・モレルは水に穴を開けて沈んでしまいたいと願った。

ステインズ氏は突然寛容になった。

「そうだな、何か良い方法がないものか——」

しかし、ステインズ夫人が再びさえぎった。彼女はぎこちなく子供の方へと近づいた。

「さあ、あなたは寒いでしょう。」

彼女は彼の腕に手を掛けて、その拳をつかもうとした。彼は自分の爪が汚れているのを知っていたので、指を二重に折りたたんでいた。

「石のように冷たいわ。お母さんも心配していらつしやるでしょう！」

「ミリアム！」

ステインズ氏は注意を引くために大声で呼んだ。

「この小さな子に、『私の横へ乗ったらどう？』そして私の暖かなひざ掛けて体を温めたらいいよ』と言っておやり。私がそうするといい、と言えばお前はそうできるね。——どうだい？」

ステインズ氏は著名なキリスト教徒であった。

「乗らない？」

と、ミリアムは母親のような気づかいを見せて、また自分の父親の保護者のなところを態度に含ませながら、少年をしげしげと見て言った。彼は彼女にとって奇妙な子供であった。厚い

灰色のスカーフを膝まで垂らしているなんて。

ポール・モレルは鼻を拭いた。彼のハンカチは赤い色で、前に自分のスレート板をそれで拭いたことがあった。このぼろぼろのハンカチは不快なものだったので、彼は真つ赤になった。メイさんは彼をやさしく椅子式車に乗せた。彼はミリアムから身を引いたが、彼女は彼に寄り掛かって、いたいけで幼弱な被保護者にビスケットを差し出した。

「今までにそりに乗ったことがあるの？」

と、ミリアムが訊いた。

ポール・モレルは重い、考え込むまなざしを彼女に向けていた。

ミリアムはほんのちよつとばかり動揺した。彼に喋らせようとした。

「あんたの名前を教えて——教えてくれない？ 何という名前なの？」

彼女は彼よりもずっと年上であるかのように、彼の肩に手袋をはめた手を置いた。少年はまた彼女を見たが、それは前と同じくゆつくりとして重い、あたかも彼女をぐらつかせないようにぐつと掴んでいるかのような確固とした眼差しであった。

「ポール・モレルだよ。」

と、彼は答えた。

彼女は更に一層動揺した。彼女の前では彼が落ち着かないのだということが分かっていた。それは彼が一人でいたために

すぎない、彼女から離れていたためにすぎないのだった。彼女は幼かったので、彼の態度に腹を立てた。彼女は手袋を脱いでポケットの中を探った。あちこち探し回っているうちに、彼女の温かな手が彼の冷たい手に触れた。彼女は震え、彼は体を引いた。そりが動いた。

「私の素敵なひざ掛けがあんたをすぐに暖かくするわ。」

彼女は子供っぽい気前の良い優しさを見せて言った。彼は彼女から身を引いた。

「このそり、気に入った？」

彼女は親切を与えたが、訊いた。

「もつと速く走れないの？」

と、彼は言った。

「お父ちゃんがそうしたければできるわ？」

と、彼女は答えた。

スピードが増した。しかしポールは、なおも遅いと思った。

ミアムは、目を大きく見開き、興奮して直ぐに笑った。彼が気に入ったのかどうかを見ようとしたり。

「そんなに速いという訳じゃないよ。」

と、ポールは言った。

ミアムはもつとスピードを出してと言った。彼女はびくびくしていた。神経質そうにポールの腕を掴んだ。ステインズ氏は、めつたにない車に乗っていた。彼はここでさえも自分が優れた存在であることを示したかった。

「いいとも、若さん達！」と彼は叫んだ。「これでどうだ！」

「荷車の半分も速くないよ。」

と、ポールが言った。

ステインズ氏は最速のスピードを出してスケートをした。彼らは湖の狭い端に来ていた。木々が水の中に生えていた。椅子式車の動滑車がヒューと音を立てた。黒い首のガン達が恐怖を覚えて、鳴きながら重々しく飛び立った。神経質な男性は向きを変えた。ミアムは青ざめ、緊張した。ポールは微かに微笑み、その目はついに開かれ輝いた。少女は彼をそつと見た。突然ステインズ氏は氷の中から蛇のように大きな黒い枝が出ているのを目にした。荒っぽく車の向きを変えた。車は車輪一つだけで動き、エレガントなカーブを描き、運転者を氷の上に投げ出し、横倒しのまま滑っていた。ミアムはポールの上に重なって転がった。ステインズ氏はX字形のように滑って行った。

ポール・モレルはできるだけ早く立ち上がった。ミアムは死んでいるかのように横たわっていた。彼女の目は神経質な恐怖で固定していた。ステインズ夫人は後部から心配そうにやってきたが、心臓に手を当てていた。彼女はスケートを履いたまままたよたと歩いてきて、脚を広げて立ち止まった。気を失いそうに見えるほど頼りなさそうに両手を広げた。ルーシーは母親の後ろから滑るように進んできたが、そのか弱い女性を氷の上にかがませた。メイさんが急いで滑ってきて、ミアムの所

までふらふらと来た。ステインズ氏は水から見回しているトカゲのように頭を上げて、大げさに悲しんだ。ただポール・モレルだけがしつかりと立っていた。彼は保護者に宣言したかっただろう。

「これは全く感情の持ち方の勉強になるな。」

とはいえ、少年は自分が原因で引き起こしたこの災難全体の結果に、あまりにもびびくりしておびえていた。ミリアムは震えすぎていてじつと立つことができなかった。ステインズ氏はこめかみまで白くなり、腹を立て、神経質そうにうろついていた。震えながら大騒ぎをし、うろつくこと以外に何もできなかった。

ポール・モレルは、自分が原因でこのように大変な事態を引き起こしたために、縮み上がっていた。彼の頭はうなだれ額の切り傷から血が流れて、目に滴っていた。何より悪いことに彼はひどく罪悪感を感じていた。それゆえ、半分茫然とした状態で、自宅の方へ向かってぶらぶらと歩いて行った。無意識状態になっているとき、彼を支配し機械的に歩かせる頑固な意志に動かされていた。ときどき不快な赤いハンカチで目を拭った。

湖の中ほどで、彼はウィリアムに出会った。後者は心配そうに近寄ってきた。

「一体どうしたんだい？　ころんだのか？　お前を探し回っていたんだぞ。」

ウィリアムは非常に憂慮して少年を抱え、氷穴から離れた。

そこで、年上の少年はうすい膜のような氷にかかると穴をうがち、少年の額を洗った。それは小さななめらかな裂け目であった。だが氷の冷たさの水を傷口に当てると気絶しそうな思いだった。ポールは青ざめて震え、開いた口から呼吸をしていた。家までの一マイルは非常に長くて骨の折れるものだった。どちらも一言も喋らなかつた。

二人がブリーチに到着したのは十二時半を過ぎた頃であった。朝はすがすがしくて美しかった。モレルの奥さんは二階で掃除をしており、そこから彼女は、青みがかつた谷間の向こうに、グレンジ農場の黄色い麦の積わらが、冬の薄青さの中で暖かく輝いているのを見ることができた。彼女は晴ればれとした気分であった。アニーとアーサーは炉の敷物の上で一緒に遊んでいたが、母親が働きながら歌うのを聞いた。このようなことはめつたにないことであつた。太陽光線が一筋差し込み、子供たちが火の近くでお喋りをするのを聞いて、カナリアも明瞭に冬の歌を歌い始めた。

裏庭の門の鳴る音を聞いたので、モレルの奥さんは寢室の窓辺まで行った。彼女はポールの無表情な顔とウィリアムのぼつた悪そうな様子を見て、たちまち持ち前の、心配による緊張感が強まった。彼女は階下へと急いだ。

「どうしたの？」

彼女は鋭く訊いた。

「ポールがころんで額を少し切つたんだよ。」

ウィリアムは答えたが腹を立て始めていた。

モレルの奥さんはちらつと見ただけで、ポールがまたもや具合が悪くなるだろうと察した。彼はあの重い、無関心な表情をしていたから。

「ああ、大変！」

と、彼女は叫んだ。

「また、こんなことになるなんて！ 一体全体どうしてこんなのだの？」

疲れた身振りで彼女はポールを抱き取り、彼の額から髪を上げた。ポールは母親がとても好きであった。彼は自分の体を彼女の手に預け、彼女が傷ついた額に手を押し当てた時またじろでであった。母親の指は彼が好きな唯一のもの、彼の求める全てであった。

「どこが痛いのか？」

と、彼女は訊いた。

「知らないよ。」

と、彼は答えた。繊細でそれゆえ性質が気難しい彼は、体が震え、それを制御できなかった。

母親は、帽子とスカーフを脱ぎながらため息をついた。

「あなたを外へ出すべきではなかったわ。ウィリアムがあなたをほったらかしにしておくかもしれないと思ってもよかったのに。」

と、彼女は悲し気に言った。

するとウィリアムは出て行って、台所のタオルに顔を押し当てて泣いた。アニーとアーサーは深刻な目つきで眺めていた。

「どこが痛いのか言ってごらん。」

と、モレルの奥さんは繰り返した。

「僕は——気分が悪いんだ。」

と、彼は震えながら答えた。

母親の目はいらいらとして収縮した。

「お前。お前が生きている限り、私は悩まされるだろうね。」

と、彼女は言った。

ポールはこの言葉を暗黙の裡に信じた。

突然母親の態度が変わった。

「ここへ来て横になりなさい。」

と、彼女は非常に優しく、なだめるように言った。彼女はソファを叩き、すぐにポールはチンツの布のカヴァーが掛かったソファに丸まった。このソファは彼の馴染みのものであり、子供時代の間はとても好きなものだった。モレルの奥さんは事態にもはやあがらおうとはしなかった。子供たちの晩御飯の支度をするために静かに動き回った。

しばらくするとポールは眠りに落ちた。体の具合が悪い時にはいつも彼は眠っている時に呻いた。母親はその呻き声を気にしなかったが、他の人間は耐えようと努力しなければならなかった。午後中ずっとモレルの奥さんはアイロンをかけていて、子供は、アイロンが赤い火の上に置かれる時やアイロン台

に載せられたりする時のカチツという音や、テーブルの上でドス、ドス、ドスという音をぼんやりと聞いていた。衣類やリネンの乾いた焦げた匂いに気が付いていた。彼が目を開けた時、母親がこちらを向くのくに気が付き、彼女の深く青い目が彼の目に合った。ホツとして、彼女の視線に抱かれているかのごとく彼は再び眠りに付いた。一度、半分目覚めた時に、彼は自身のどの音を聞いた。次に、半ば眠りながら、母親が熱いアイロンを頬の近くにかざして炉の敷物の上に立っているのを見た。唇をぎつちりと結んで、あたかも熱の音を聞いているかのような彼女の静かな顔は、彼に甘美な感情を与えた。彼女は沈黙している時の様子が、とても勇敢で命に溢れていて最高の姿をしているように思われた。彼女はアイロンに唾を吐きかけた。すると唾の小さな玉がはじけて、黒く光るアイロンの表面を走り去った。モレルの奥さんはひざまずいて、炉の、麻でできた敷物の裏地にアイロンを力強くこすり付けた。彼女は火が反映して赤っぽかった。その動きは軽く、カモメが海に潜ったり体を傾げたりすると同じくらい正確であった。部屋は暖かかったし、アイロンを当てられたリネンの甘い香りに満ちていた。ポールは再び心地よく眠りに落ちて行った。

遅くなつて、教区牧師がやつてきた。レヴェル氏は、人気になかったけれども小さな教会堂に滞在していた。しかし、今年に百五十ポンドを得る師となつていたので、ほんのわずかの給料しかもらつていなかった。彼はモレルの奥さんに非常に傾

倒して、彼女が視界にあると憧れるように彼女を見つめていた。彼女の方では、彼を自分の大きな子供の一人のように思っているだけであつた。彼は全くその通りであつた。彼は年を取るにつれて、雄々しくなる代わりに、なお一層夢見がちで思索的になつたので、平凡な人々みんなが、彼は「ちよつとおかしい」、「風変わりだ」、「うつつを抜かしている」、「少し気がふれている」と言った。モレルの奥さんは彼を気の毒に思ったが、しばしば彼は人を疲れさせる、と思つた。彼女自身は堅実に物事を考え、結論に至るまで決して休まなかつた。それゆえ、彼がぼんやりとあれこれ考えていることは彼女を疲れさせた。漠然と彼もこのことに気が付いていて、彼女のために何かをしてあげたい、彼女の知人であることを確立させたい、とひたすら思つた。これを成し遂げないならば生きていくことはできないと思つた。彼は支えが必要だつたのだ。

「あの子がああ声を出す時、あなたは気になりませんか？」
と、レヴェル氏はポールのことをほのめかしていった。モレルの奥さんはアイロンを掛けながらじつと立っていたが、少年を見た。

「あの子は具合が悪いときはいつもあのような声を出すんです。」
と、彼女は答えた。

「あれは私を——」
レヴェルは瞬きをし、夢想した。モレルの奥さんはアイロン

をかけ続け、彼に少し注意した。

「あの声は私を奇妙な気分にします。」

と、彼は言い終えた。

モレルの奥さんは返事をしなかった。

「あの子はお気に入りの子ですか？」

レヴェル氏は、突然、びつくりさせる質問をした。モレルの奥さんは笑った。

「わかりません。自分の子供をひいきすることはありません、レヴェルさん。でもこの子は私に一番心配を掛けます。だから、たぶん——」

「あの子のために私に何かできることはないでしょうか？」

レヴェル氏は、思いに沈んで訊いた。彼が何かをしてあげたかったのは母親であつた。モレルの奥さんは微笑んだ。

「あなたにはあの子の心の父親になつていただけでしよう。」

と、彼女は答えた。

「そうですか？」

と、彼は彼女の考えを肯定して答えた。彼は頭を片側へ傾げて、夢想し始めた。

(続)